央部を本拠とするルームのセルジュク朝（一〇七五－一三〇八）時代には墓碑銘を含む、多くの刻銘文資料が残っており、それらの内容を正確に解読して手稿本資料などと対照することで詳細な局地情報を得ることが可能である。各地のアラビア文字刻銘文資料を十二－二〇世紀の時代状況の変遷を視野に入れながら解読、考察することで、セルジュク朝という時代の特性を際立たせることも出来る。これまでの私の研究成果として、セルジュク朝は十三世紀半ば過ぎまでアッバース朝のハリーファとの関係を特に重視し、スルターンとシャーハーンシャーフ（諸王の王）を称号とし、テュルク系の王朝でありながら刻銘文資料上ではテュルクという語を使用することがなかったことが判明する。刻銘文資料上でルームのセルジュク朝に特有の支配者称号は「ふたつの海のスルターン」であり、この称号は一二一六年以降半世紀にわたって四人のスルターンが使用したもので、これまでのところ刻銘文資料上での使用例を九点確認している。ここで言うふたつの海とは、アナトリアの南北に位置する黒海と地中海を意味し、それまでは海洋への関心が薄かったセルジュク朝が海洋への進出を意図するようになったことを示唆する点で、後のオスマーン朝の海上進出へとつながる画期的な表現であったと考えられるのである。

二〇一九年度史学研究会大会・総会の記録

二〇一九年度史学研究会大会・総会は、一一月二日（土）午後一時より、京都大学文学部第三講義室において開催された。

総会では、田中和子理事長による挨拶の後、谷口淳一氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・後方に関する報告・審議がなされた。

庶務（金澤周作常務理事）からは、役員の交替および会員数の動向、そして『史林』のリポジトリ化の進行について報告があり、加えて、四月一八日（土）午後一時より京大文学部第三講義室を会場として行う来年度の例会テーマを「ジェンダー」とすることが報告された。

編集（上島享常務理事）からは、『史林』の刊行状況について説明があった。

会計（谷川穣常務理事）からは、二〇一八年度決算および二〇一九年度予算について説明があった。

広報（塩出浩之常務理事）からは、例会・大会のためのポスター作成と、ホームページの管理についての報告があった。

以上の報告はすべて原案通り承認された。

大会では、次の二本の講演が行われた。

難波洋三氏
「弥生時代の青銅器の原料金属の流通」

井谷鋼造氏
「アラビア文字刻銘文資料とセルジュク朝史研究」

講演者紹介と司会は、それぞれ吉井秀夫理事と磯貝健一理事がつとめた。講演内容は本号に掲載されているので参照されたい。

公開講演ののち、金澤周作理事が閉会の辞を述べて会を終了した。

（文責　金澤周作）

史学研究会会則

（二〇一〇年一一月二日改正）

第一条　本会は史学研究会と称する。

第二条　本会の事務所を京都大学大学院文学研究科内に置く。

第三条　本会は広く歴史に関心を持つ者が集まり、史学・地理学・考古学に関する研究を行うことを目的とする。